

St. Luke's International University Repository

「二人称の科学」の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野家, 啓一, Noe, Keiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014921

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「二人称の科学」の可能性

野家啓¹⁾

1. 近代科学の特質

看護学は、もちろん医学をはじめとする科学的知識に基づかなければならないが、同時に喜怒哀楽をもった生身の人間を相手にする以上、自然科学の領域だけに留まることはできない。つまり、一方では「理論知」に依拠しながらも、他方では「実践知」ないしは「臨床の知」という性格をもつことが要求されるのである。この二面性を以下では「三人称の科学」と「二人称の科学」の違いという観点から考えてみたい。

「科学 (science)」はもともとラテン語の「知識, 知 (scientia)」に由来する言葉である。それゆえ、英語に science の語が導入された 14 世紀頃には、その意味はほぼ knowledge (知識) と同義であった。それが「観察や実験など経験的方法に基づいて実証された法則的知識」という今日の「科学」の意味を獲得するのは、17 世紀の「科学革命」を経て後のことである。

近代科学はこの科学革命という知的変革の出来事を通じて、それまでのアリストテレス的自然観を打破すると共に、その方法論を「仮説演繹法」という形で整備していった。すなわち、現象を説明する仮説を提起し、それを実験や観察によって検証するという方法である。その仮説は、基本的に数量的な関数関係によって定式化される。それゆえ、近代科学の精神を端的に表現しているのは、ガリレオの「宇宙という書物は数学の言葉で書かれている」という一句にほかならない。つまり、自然界は数学的構造をもっており、それを支配する法則は数式によって記述される、ということである。20 世紀の哲学者フッサールは、これを「ガリレオによる自然の数学化」と呼んだ。

ガリレオやデカルトによれば、自然の实在の性質は数量的に測定可能な「一次性質 (長さ, 重さ, 形, 速さ, 等)」に限られる。他方で、数量化できない「二次性質 (色, 音, 匂い, 手触り, 等)」や「心的述語 (痛い, 痒い, 嬉しい, 悲しい, 等)」は、単なる主観的性質にすぎないものとして、自然科学の語彙からは排除されていた。ガリレオが「耳, 舌, 鼻をそぎとってしまったら, 形, 数, 運動はたしかに残るが, 匂いも, 味も, 音もまったく残りはしない」(参考文献(1))と述べているように、二次性質は人間の感覚器官に依存する性質であり、自然

界に实在性をもたないものとされた。言い換えれば、人間の感覚器官や心によって感じ取られる諸性質は、主観的相対性を免れないため、自然科学の客観的記述とは相容れないのである。

このような自然観に基づいて形作られたのが近代科学の帰結である「機械論の世界像」ないしは「古典物理学的世界像」にほかならない。したがって、自然に関する法則的知識の集大成である科学理論は、次のような特徴をもっている。

- ・普遍性：いつでもどこでも誰にとっても妥当する真理
- ・論理性：数学的演繹の厳密性
- ・客観性：主観的な価値判断や利害関心からの独立性
- ・実証性：観察や実験による検証または反証の可能性

このような特質を備えた近代科学の中核はニュートンによって完成された物理学、つまり「物」の「理 (ことわり)」を探究する学問であった。言い換えれば、物 (物体, 物質) を対象とする「三人称の科学」である。そこでは、「人」もまた「物」としての性質 (一次性質) をもつ限りで科学的考察の対象となるが、感覚や感情をもった「心ある」人間は対象とはならない。その意味で、物理学が対象とするのは無視点で無色無音無味無臭の「死物」の世界である (逆に言えば、このように考察の対象を限定することによって、物理学は目覚ましい発展を遂げることができた)。

しかし、人間が生きているのは二次性質や心的述語に彩られ、感覚や感情に溢れた世界であり、フッサールはこれを「生活世界 (Lebenswelt, life-world)」と名づけた。一次性質のみに注目した物理学の言語は、その一面性によって、われわれが住む生活世界を十全に記述することはできない。そのためフッサールはガリレオについて「物理学の、したがってまた物理的自然の発見者ガリレオは、発見する天才であると同時に隠蔽する天才でもあるのだ」(参考文献(2))と述べている。つまり、ガリレオは生活世界を「数式の衣」で覆い隠した天才というわけである。

2. 物語りの説明と二人称の科学

自然科学が「物」の性質や状態を客観的に記述する「三人称の科学」であるとすれば、看護学をはじめ「実践知」や「臨床の知」に根ざす人間科学は、二次性質や心的述語を含んだ生活世界を記述する「二人称の科学」だと言える。そこで目指されているのは、客

1) 東北大学大学院文学研究科教授

観的世界の「リアリティ」を説明することではなく、人間の経験の「アクチュアリティ」を理解し把握することである。

このリアリティとアクチュアリティの区別については、精神医学者の木村敏が「同じように『現実』とはいっても、リアリティが現実を構成する事物の存在に関して、これを認識し確認する立場から言われるのに対して、アクチュアリティは現実に向かって働きかける行為のはたらしそのものに関して言われる」（参考文献(3)）と述べていることが示唆的である。もともとリアリティは、語源的にはラテン語の「事物 (res)」に、他方でアクチュアリティは「行為 (actio)」に由来する。それゆえ、前者は自然科学の領域に、後者は人間科学の領域にほぼ対応している。人間科学の目標は、何よりも人間の行為の理解と記述であり、その基盤にあるのは「我-汝」の関係、すなわち人と人との相互関係にほかならない。われわれがそれを「二人称の科学」と呼んだゆえんである。

事物の運動が一次性質の間の数量的関係（関数）として記述されるのに対し、二次性質や心的述語を含んだ人間の行為の記述は通常「物語り (narrative)」の形をとる。「物語り」とは、二つの出来事を時間的進行に従って組織化する叙述形式のことである。この点については、小説家の E.M. フォースターが『『王様が死に、それから王妃が死んだ』』といえはストーリーですが、『王様が死に、そして悲しみのために王妃が死んだ』』といえはプロットです。(中略) ストーリーなら『それから?』と聞きます。プロットなら『なぜ?』と聞きます(参考文献(4))と述べていることが参考になる。われわれの言う「物語り」は、この「プロット」に相当するものと考えてよい。つまり、三人称の科学が「それから?」という問いに法則をもって答えるとすれば、二人称の科学は「なぜ?」という問いに適切な物語りを提示することによって答えるのである。

二つの出来事を因果的に結びつけて説明するという点では、科学的説明と物語りの説明との間に決定的な差異は見当たらない。違いはその結びつけ方に存する。比喩的に言えば、科学的説明は二つの出来事を最短距離の「直線」で結びつける。つまり、因果法則による一義的な説明を目指すのである。その一義性を確保するために、近代科学は主観的な語彙を排除し、客観的なストーリーを形作る方法論を洗練させて行った。

それに対して、物語りの説明は二つの出来事を多様な「曲線」で結びつける。先の例で言えば、王妃の死の物理的原因は、科学的説明であれば「心停止」にせよ「出血多量」にせよ、いずれにせよ一義的に定めることができる。他方で物語りの説明の場合は、「悲しみのために王妃は死んだ」のほかにも、「絶望の余り王妃は自ら命を絶った」や「ショックで王妃は気を失い、階段から落ちて死んだ」など、多様な可能性を考えることができる。「曲線」と形容したゆえんである。

科学的説明の妥当性は、最終的には経験的証拠に基づく「真/偽」の判断に帰着する。自然科学が目指すのはリアリティの解明であり、それは「万人にとって」普遍的に理解可能なものでなければならないからである。それに対して、物語りの説明については真/偽の一義的な決定はなじまない。むしろ、その基準となるのは「適切/不適切」の判断だと言うべきであろう。人間科学が携わるアクチュアリティの把握には、「誰にとって」という個別的な視点と人称性が介在しており、それを排除することはできないからである。

その点で、物語りの説明は、理解可能性のみならず当事者にとっての「受容可能性」を持たねばならない。人間科学が事物のリアリティではなく、人間の行為や人間の経験のアクチュアリティに関わるものである限り、それは法則的な一般化よりは、個別事例に即した受容可能な物語りの説明を必要としているのである。したがって、そこでは「誰が誰に向かって何を語るのか」という発話のポジションナリティが問題とならざるを得ない。物語りの説明においては、話し手と聞き手の間の人称的関わりと相互作用が不可欠のファクターとなるからである。

人間科学はこれまで、自然科学をモデルにして定量的・数学的方法を積極的に導入し、普遍性と客観性をもった「三人称の科学」たらんと努めてきた。しかし、近年の「ナラティブ・セラピー」や「ナラティブ・ベイスト・メディスン (NBIM)」の問題提起に見られるように、臨床的な人間科学は「ナラトロジー (物語り論)」の方法を医療や看護の現場に積極的に援用し始めている。このことは、人間科学の中に「三人称の科学」から「二人称の科学」への転換の動きが出てきたことを示すものであろう。その意味で、ナラトロジーは「実践知」や「臨床の知」に方法的基盤を与え、「二人称の科学」の可能性を切り開く概念装置なのである(参考文献(5))。

参考文献

- 1) 青木靖三(訳編)『ガリレオ』平凡社、1976年。
- 2) E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、1995年。
- 3) 木村敏『偶然性の精神病理』岩波現代文庫、2000年。
- 4) E.M.フォースター『小説の諸相』中野康司訳、みすず書房、1994年。
- 5) 野家啓一「物語り行為による世界制作」、『思想』2003年10月号。